

離島固有の資源を生かした 地域づくりと観光交流の在り方

本誌編集部

本財団では、令和五年三月三〇日、全国町村会館にて「しまづくりフォーラム」を開催した。多くの離島において新型コロナウイルスによって阻害されてきた交流を促進するためにも、新たな視点から多様な人材を交えた離島の交流の在り方が問われている。今回は、離島の持つ自然特性や保養効果に着目し、これらを活かした交流の可能性などに知見を有する福岡孝純日本女子体育大学招聘教授と谷本都^と栄^え帝京大学准教授を講師に招き、地域資源の再評価や交流拡大に向けたチャンネル開拓のあり方などを討論した。

当日は、地域資源の活用や交流の推進などに関心を持つ方々など約三〇人による来場・オンライン視聴があった。



谷本 都栄 (たにもと とえ)

東京農業大学大学院造園学専攻博士後期課程修了。学術博士。レジャー・レクリエーションに関わる環境計画や人材育成、遊び・スポーツ・文化活動による社会課題解決の支援等に取り組む。

講演① ウェルビーイングを生み出す島づくり／ポストコロナのアイランドセラピー

帝京大学准教授 谷本 都栄

アイランドセラピーは、一九九六年に国土庁（当時）などによって提案された「島の地域資源を活用した健康づくり活動」の構想である。コロナ禍を

経て、人々のウェルネス志向が高まり、自然療法に注目が集まっている。谷本准教授は「豊かな自然、独自の景観、地域に根ざした暮らしや文化など島の資源を活かして自然治癒力の向上を図るアイランドセラピーは、時代のニーズに合っている。地域づくりの面からも可能性が大きい」と話す。

谷本准教授によると、アイランドセラピーには、①島へ転地することによる日常生活からのリズムチェンジ、②気候や自然を活用した各種療法などによる心身各機能の回復、③健康意識の向上による生活の質の改善などの効果が望めるという。同セラピーの推進には、その島の特性を療養などのプログラムにどう落とし込んでいくかがボイ

ントとなる。「島の隔絶性は利便性などの面ではハンデでも、裏を返せば固有な自然や独自の文化が残されているなどの強みに転嫁できる」

アイランドセラピーの推進は、島へ行く人や島に住む人、地域全体のウェルビーイング（よりよく生きること）につながる」と、谷本准教授は指摘した。

講演② 島に行って元気になる 「アイランドセラピー」の検証

日本女子体育大学招聘教授 福岡孝純

ドイツにはクアア（健康保養制度）があり、療養や保養目的の中長期休暇に保険が適用される。福岡教授によると、クアアは日本の湯治を参考に作られたとされ、近年、休暇期間は短くなっているものの制度は続いているという。「現代は、ICT化の進展などにより効率主義が進み、管理化社会になっている。個人の生活が規範化され、人間

らしさを発揮する場が失われることで、『人間疎外』が起きている」と、福岡教授は分析する。

人間疎外には、おもに生活空間の狭小化などによる身体的疎外、精神的不安などの心理的疎外、家庭や社会などでの人間関係が不安定になるなどの社会的疎外があげられるが、これらの閉塞状況の改善には、離島に滞在／生活し、暮らしのリズムを変えることが役立つという。

「規範性ではなく、『多様性』を大切にする。アイランドセラピーでは、心理・身体的効果に加え、新たな人間



福岡 孝純（ふくおか たかずみ）

次世代型の地域振興、自然環境を活用したリゾート運営の研究等に取り組む。子どもの環境教育などの踏査を推進、人間疎外防止対策に努める。(株)日本スポーツ文化研究所代表取締役。理学博士。

関係構築などによる社会的な効果も得られる。たとえ短期滞在であっても気分転換などの効用はある」

福岡教授は、豊かな自然の力を借り、主体的に行動することで、自らストレスを解消させ、幸福をつかんでほしいと来場者・視聴者に訴えた。

◆ 両氏の講演に続き、意見交換が行なわれた。ドイツのクアアと異なり日本でアイランドセラピーが普及しない理由、冬のオフシーズンの誘客につながる島のアクティビティ、島の住民側のウェルビーイングの実現などについて、多岐にわたる議論がなされた。

フォーラムは、「交流は、島へ行く人だけではなく、島の住民や地域コミュニティの活力にもつながる。互いに尊重し合い『ファミリー・フィーリング（家族のような絆）』を作っていくことが大事」との福岡教授の言葉で盛会裡に閉会した。

（森田）